注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
ＳＡＯ／耳栓のランサー

【作者名】
しるべ

【あらすじ】
デスゲームとなったＶＲＭＭＯ《ソードアートオンライン》
初期動作テストでフルダイブ不適合になってしまった主人公クリス。
それでもなお、最前線で戦い続ける青年の物語り。

基本的に原作の設定を守りますが、不明な点やソードスキルはオリジナル設定とさせていただきます。

最近、自分の作品を読み返すと文章の拙さが滲み出ており、悲しいです。
意見、感想などがあったらビシバシとよろしくおねがいします。
少しでも読みやすい文章を作っていけるように、楽しい物語を作っていけるように精進していきますので、これからもよろしくお願いします。

ここ数年、生活環境の変化で更新が途絶えていましたが、ようやく

落ち着いてきましたのでちょくちょく更新をしていきたいとおもいます！

フルダイブ不適合

目を開けると最初に見えたのは、今までに見たことがない様な巨大な塔だった。
俺は大きく目を開けたまま立ち尽くし、呟く。

「やっと、来れた・・・」

そう呟くと同時に叫び声が聞こえた。
それは、俺と同じで巨大浮遊城「アインクラッド」に来れた喜びによる歓声だった。
苦渋の表情を浮かべ、まだ人で溢れ返っていない町へと駆け出して行った。

ＦＮＣ。フルダイブ不適合。
それは、俺がナーヴギアの初期接続テストで出された結果であった。
フルダイブ不適合とは、フルダイブ環境になった場合に五感のどれかが完全には機能しないとか、脳との通信に多少のラグなどが発生してしまうことを言う。
普通は大した障害にはならないが、中にはフルダイブそのものが不可能になると言うケースもあるらしい。
俺のＦＮＣはフルダイブが不可能になるほどの物ではなかったが、五感の聴の部分に異常を来たしていた。それは、聞こえないわけでは無く、聞こえすぎる異常であった。
発売される三日前からショップに並びようやく手にしたときには涙が溢れた。それに合わせてナーヴギアも一緒に買った。ようやく憧れていた冒険と言うものに出会えると思っていた矢先のフルダイブ不適合。
もちろん、俺は一万しか販売されないソフトを入手出来たのにも関

わらず、異常があるために諦めるということは出来なかった。
試しに他のＶＲゲームをしてみたところ、人がたくさん集まっているところに出ると、声が聞こえすぎて吐き気を催した。
十数分ならば我慢できると悟った俺はその日からＳＡＯの情報を集めた。最初の町から次の町への道、その間に生息しているモンスター、ショップに売っているアイテム、βテストをしている人たちから集められるだけの情報を集めた。
そこで、最初の町から少し先に行ったホルンカという村に耳栓と言うアイテムがあることを知った、そのアイテムを装備することによって周囲の音を九割カットしてくれるアイテムだと言う。
ホルンカまでの道のりは険しくなく、ほどんどが非攻撃モンスターで行くまでは安全で狩りの拠点にもしやすい。
耳栓を装備するまでは一切、人との接触を避けたかった俺は最初の町から即刻にホルンカに行くことを決めていた。
急いで最初の町でショートスピア二本と回復ポーション五本を買った俺は近くの草原へと向かった。

「とりゃ！」

掛け声と同時に槍の矛先が青いイノシシに当たった。
しかし、ＨＰは三割ほどしか削られておらず、イノシシはこちらに目掛けて突進をしてきたが、紙一重で突進を回避する。青イノシシは最初に出てくる雑魚モンスターだが、空振りや攻撃被弾をしているうちにＨＰを七割削られてしまった。

「あぶなっ・・・・・・それにしても情報で対処方は分かってたけど速いな」

予想していたよりも難しいソードスキル発動に焦りを覚えながらも、俺は情報サイトに載っていたコツを思い出す。
「大切なのは初動。タメを意識して・・・スキルが立ち上がったと思っ

たら、あとはスキルのモーションを意識しながら放つ！」
今までとは比べ物にならないほどの滑らかな動きで地面を蹴る。青イノシシもクリスに向かって突進を仕掛けようとしている。
青イノシシが突進するよりも早く、心地よい効果音を響き渡り、槍の先端が青色の線をクリスと青イノシシの間を繋ぐ。複合槍突進技《プリック》が、青イノシシの眉間に命中し、七割近く残っていたＨＰを吹き飛ばした。

「うしっ！」

小さくガッツポーズをした俺は再び、十メートル近く離れたイノシシに狙いを定めた。気が付かれないように数メートル近づき、短槍を振りかぶる。投剣スキル基本技《リサールシュート》のモーションを起こした。
相手がこちらに気付いていない場合には先制攻撃のチャンスがある。放たれた短槍は吸い込まれる様に青イノシシの体に突き刺さり、ＨＰを半分近く削った。
イノシシもこちらに気付き突進してきたが、一直線に突っ込んでくるだけなので、慣れたら余裕で避けられるようになる。突進を避けられたイノシシは急旋回も急停止も出来ないらしく、こちらに背を向け徐々に速度を低下させている。それを追うように用意してあった短槍を拾い《プリック》を発動させ、後ろから突き刺す。ＨＰが無くなり、ガラスの様に砕け散った。

クエスト発生

狩りを初めておよそ三時間が経っていた。
すでに、青イノシシは百体近い数を倒して、レベルも一つ上がり、青イノシシのドロップアイテムである《フレイジーボアのツノ》も三十個ほど集まった。
青イノシシはＳＡＯ内では最も弱いモンスターであるが、そのドロップアイテムは最下級の刺突系武器の強化材料にもなる。
強化できるのは、始まりの町に売っている武器のみではあるが、それでも強化をすればそこそこ強くなる。

「一旦、町に戻るか・・・・・・」

薬も切れてしまった俺は渋々町に戻ることにした。
町までの帰り道の途中で団体の一つが何やら騒いでいた。

「本当にログアウトボタン本当にねぇよ・・・・・・」

「ＧＭコールしてみろよ、システム側から落としてくれるかもよ」

普通の人間であれば聞こえもしないような声であったが、聴力が異常を来たしている俺にとっては十分な大きさだった。
そんな訳無いだろうと思いつつも、右手の人差し指と中指をまっすぐ揃えて掲げ、真下に振る。
すると、《メインメニューウィンドウ》が鈴を鳴らすかの様な効果音と同時に現れた。
半信半疑でメニュー画面を下に滑らす、一番下にこの仮想世界から脱出するログアウトボタンがあるはずだ。
メニュー画面がこれ以上下がらなくなった、一番下のボタンは空白になっている。情報サイトではここにあると書いてあったはずだ。

もう一度メニュー画面を見直す。
無かった。
どこを探しても無い。
「まあ、公式サービス初日だしな、バグもあるだろ。そのうち直るって」
先ほどの団体の言葉で少し安心したが、一抹の不安を抱えながらも町にも戻ることにした。
町に戻ると、聞こえるのはログアウトボタンが無くなった話題ばかりであった。
皆が不安になって声のボリュームが小さくなっているのか、それとも狩りに行っている人が多いせいか、声があまり聞こえない。
そのおかげで、気分が悪くなることなく、鍛冶屋にたどり着くことができた。
店内に入ると、聞こえる声も小さくなり、肩をなでおろす。
すぐさま、カウンターにいる店員に話しかける。
「いらっしゃいませ。メンテナンス、強化のどちらですか？」
「メンテナンスと強化どちらもで」
ＮＰＣとの会話は単語のみでも成り立つ。
例えば、今の強化か修理かと聞かれた場合、「強化と修理」だけでも成り立つがそこは雰囲気を味わうためだ。
「メンテナンスと強化ですね」
「はい」

ＮＰＣとは言え、年上の女の人には敬語を使ってしまう。

「強化品はショートスピア二本で、素材は基盤のみ買取で」

「了解しました」

カウンターの上にショートスピア二本と《フレイジーボアのツノ》を三十個を出す。

「一本に添加材を十五個づつ使って、＋１づつにしてください」

ＳＡＯの武器強化素材には二種類あって、一つは《基盤》で固定で必ず必要である。

もう一つがもっと重要で《添加材》と言う。これは任意であるが、どの添加物をいくつ使うかで成功率と強化の種類が決まる。

俺が出した《フレイジーボアのツノ》は鋭さの強化素材なので、攻撃力があがるというわけだ。

「了解しました。スチールが八個で４００コル、それとメンテナンスと強化の手数料を合わせまして、８００コルになります」

先ほどの狩りで稼いだ金額の七割近くの金額だが、仕方の無い出費と割り切り支払う。

今回出した添加材が十五個で成功率は九割。最悪の場合でも安価なショートスピアが攻撃力がアップしないまま帰ってくるだけだ。

そこまで悪い出費ではないと考えながら、支払うと店員は材料を持って奥の鍛冶場へと運んでいった。

カン、カン、と言う心地の良い音であるはずのインゴットを叩く音も、常人の十数倍の聴力を持っているとなると頭痛の種にしかならなかった。

インゴットを叩く音が終わり、しばらくすると店員が裏から出てき

て、ショートスピアを二本カウンターの上に置く。

「おめでとうございます！二本とも成功です」

成功したときは、いつもこう言う様にプログラムされているだけのNPCの言葉が妙に嬉しかった。

ありがとうございます！と言うとNPCが話しかけてきた。

「冒険者さんはこれからお出かけですか？」

「えっ、はい・・・・・・そうですけど」

NPCから話しかけられるとは思ってもみなかった俺はうまく話せない。

少々戸惑ったがNPCはそれ以上話しかけてこない。すると店員の頭上に金色のクエッションマークが点灯した。

これはクエスト発生の証で、幾つかあるクエスト発生フレーズを思い出す。

「何かお困りですか？」

ホルンカの村

　クエストを受け、外へと出る。
　簡単なクエストだったが、報酬がとても良かったのだ。
　報酬は槍の《スチールショートスピア》であまり難しくないわりに簡単だったのだ。
　しかも、丁寧なことに選択肢までも用意されてあった。
　スチールスピアの長さが、短いものと、普通のものと、長いものの三通りの選択肢があった。
　槍は生産するときに任意の長さを決めることができる。
　短槍だと、短いため小回りが利き、攻撃を素早くすることができる。
　そして最大のメリットは投剣スキルによって投げることも可能という点だ。
　投剣専用武器に比べると、命中率は心もとないが威力が凄まじく、なおかつ武器本体を強化し、さらに威力が増すという優れものだ。
　長槍の利点はリーチが長いという事、牽制攻撃が優秀で，βテスト時のタンクの三割近くの人が長槍を使っていたらしい。
　普通の槍は、短槍と長槍間といった感じだ。小規模ギルドの人たちでタンクも出来、アタッカーにもなれる万能屋で重宝されたらしい。
　その三つが用意されていたクエストはとにかく簡単で、ホルンカの村の装備屋に作った装備を送ってほしいと言うものであった。
　そして、一番気になったのは、このクエストは情報サイトには載ってなかったことだ。
　こんなにも簡単なクエストが野放しにされているほど情報サイトに穴があるわけが無い。
　つまり、これは特殊な条件によって起こるクエストというわけだ。
　初めて情報サイトに載っていなかった情報を手に入れた俺は柄にもなくスキップをしていた、幸いにも周りには人もいなく声も聞こえない。
　この武器の強化方法を考えていた時、突然鐘のような、警報機のよ

うな大ボリュームのサウンドが鳴り響いた。
突然の音に油断していた俺はうずくまってしまった。
すると、かろうじて開けていた目に映ったものは、鮮やかなブルーの壁であった。
次第に、音は小さくなっていき余裕を取り戻せた俺の前に現れたのは色とりどりの装備、髪色、美男美女の人々であった。
数秒間、俺と同じように呆然と立ち尽くしていた前に居た大男が叫んだ。

「どうなってんじゃー、はよゲームから出さんかい！」

それをきっかけに回りにいた人たちがひそひそ声で会話を始め、次第には喚きものも現れた。
約数千人――いや、現在ＳＡＯログインしている全プレイヤーの声はとても耐え切れるものではなかった。
しばらくの間、うずくまり耳を塞いでいると急に静かになった。
辺りを見渡すと、上空には真っ赤なフォントで染められた【Ｗａｒｎｉｎｇ】、そして【Ｓｙｓｔｅｍ　Ａｎｎｏｕｎｃｅｍｅｎｔ】の文字。
そして、二十メートルはあるであろう、真紅のフード付きローブを纏った巨大な人がたたずんでいた。
よく見ると顔が無く、フードの裏側がはっきりと見える。
周囲のプレイヤーが騒ぎ始め、再び頭を鈍痛が襲う。
すると、それらを抑えるかのように巨大なローブの袖が動く。袖口から純白の手袋が覗いたが、袖口と手袋の間にも肉体は無かった。
続いて、両手を広げて、低く落ち着いたている男の声が遥かなる高みから降り注いだ。

『プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ』
この後に続いた言葉は現実のものとは思えなかった。
要約すると、このソードアートオンラインの世界での死は現実の死

と結び付けられており、こちらの世界で死ぬと現実世界の俺の体は脳を破壊される。
この世界から脱出する方法は、巨大浮遊城『アインクラッド』の、のべ百層を全て攻略しなければならないらしい。βテストでろくにも上れなかったのにも関わらず、百層をクリアしろなんて不可能に近い。
ありえない虚言を吐いた巨人は最後に置き土産をしていった。
それは、現実世界の顔がこの世界の顔になってしまうものだった。
広場にいた大勢の美男美女は同人誌即売会に参加している人を一万人集めればこういうものができるだろう、というものに変化し、男女比も大幅に変わった。
その後、幾つか言葉を残し、中身のない巨人は消えた。
俺は、周りの喚きや泣き声に頭痛が起き、逃げるようにその場を去った。

向かった先はホルンカの町。
このゲームがデスゲームと化してまだ、数分しかたっていなく、ホルンカへと続く道には俺一人しかいなかった。
それはそれで好都合なのだが、いまだにゲーム内で死んだら本当の死ぬとは考えられず、実感が湧かない。
そのせいなのか、ホルンカへの道のりは順調であった。
深い森の中の迷路じみた、小道を抜けるとそこには小規模ながらも村があり、狩りの拠点として使える最低限の設備は整っていた。
村に着くなり、すぐさま装備屋に駆け込む。

「お届けものです」

と、声をかけると。

「あにゃーなんじゃねー」

と、言う気の抜けた声が聞こえた。
店の裏から出てきたのは、齢九十は超えていそうな老爺であった。
「だから、おとどけものです！」
「買い物かいねー、良い物そろってるよー」
「始まりの町の鍛冶屋から注文の品のお届けものです！」
必死に叫ぶ、しかし老爺は首を横に傾げるばかり。
「あー、買取かいなー。おーい、ばあさんやー」
こんな事を繰り返すこと十分。ようやく、クエストを達成することができた。
幸いだったのが、老人たちはとても小さな声で喋ってくれていたことだ、もちろん普通の人では難儀する小ささだったろうが。
「こりゃー、俺以外のひとはもっと時間がかかるな」
と、苦笑いを浮かべながら雑貨屋へと向かった。
雑貨屋は露天で開かれていて、店員は三つ編みをしていて、麻の服にエプロンを下げていた、いかにも村娘と言った感じである。
「いらっしゃいませー。何をお求めですか？」
本当に生きているんじゃないかと思えるくらいの生き生きとした表情。
始まりの町の鍛冶屋の事務的な会話とは少々違う。
目の前に、半透明の青色のウィンドウが開いた。その中にある耳栓

と言うアイテムをクリックし、ついでに回復ポーションもクリック。
決定ボタンを押すと。

「ありがとうございましたー」

と、無邪気な笑顔を見せる。
少し雑貨屋から離れて振り返ると、村娘は手を振ってくれた。照れながらも振り替えした時に気が付く。

「NPC相手に何照れてんだよ！」

自分で自分を突っ込まざるを終えなかった。
NPC相手に恋をしかけてしまうほどに、人が恋しくなった。
訳もわからず、ここまで走ってきたが人との関わり合いは一度もなかった。人肌恋しくなったというかなんというか。
とりあえず、耳栓を装備する。
急に耳が遠くなり、今まで聞こえていたものが聞こえなくなった。
最初に訪れたのは不安。次は喜びであった。
ようやく、人と普通どおりに接することができることに、感激し始めた俺はホルンカの村にぽつぽつと現れたプレイヤーに話しかけに行くことにした。

人の温かさ

「すみません、ちょっといいですか？」
　俺は雑貨屋で買い物をしていた片手剣を腰に下げている男に話しかけた。
「なんですか？」
　視線をこちらに向ける。
　俺が喋るより前に相手の視線は一点に集まった。
「ていうか、耳の中にあるやつなんだ？」
　まあ、もっともな意見である。俺自身も耳の穴の中に何かを入れている男に出会えば聞いてしまうだろう。
　嘘をいう事はできるはずも無い、もし本当にこのゲームがデスゲームとなってしまったのならば、俺は足手まといにしかならないだろう。
　自分のＦＮＣのことを言うと、片手剣の男は左右に首を振って、一言侘びをいれてから森の中に消えていった。
　続けざまに数名のプレイヤーとも話をしたが、全員に耳栓のことを聞かれ、最初に出会った男のように首を振るだけだった。
　おそらく、現在ここにいるのはβテスターだけであろう。彼らはソロの方が効率的なのを知っているし、ＦＮＣの俺をお荷物になんて効率的ではない。
　少し不安に思ったのが、およそ二時間前に起こったであろう悲劇の話しを一度もしなかったことだ。彼らも俺と同じでいまだに信じられないのだろうか。
　湖へと石を投げる。

先ほど、ぼおっとして歩いている最中に見つけた場所だった。
村の大通りからさほど遠くなかったため《圏内》であるためモンスターに襲われることはない。
水面に近寄り下を向く。
ゲーム開始当初は、逞しく育った肉体に爽やかな好青年を思い浮かべるような姿であった。
水面に浮かび上がっている姿は、筋肉は減り、逞しさは失われていた。爽やかな好青年は、残念な好青年へと進化している。
昔、友達に「残念な好青年」のあだ名を付けられた時のことを思い出し。少し笑うが、すぐにため息が漏れた。
学校では友達は多いほうであった。みんなから色んなあだ名で呼ばれて、そこそこの人気者だったと自負している。
SAOを買うため三日間並んだときも、ゲームには興味も無い友達が差し入れを持ってきてくれたことを思い出し、ため息が涙へと変わった。
とにかく、助けがくるかわからない状況の場合は、その状態で生き延びられる方法を考えるべきだ。
俺が立ち上がろうとした瞬間。

「だめぇーーーー!!!」

と、言う声と同時に背中に衝撃が走った。
ふらつく足を何とか押さえつけ、振り返るとそこには俺に抱きついた女の子の姿があった。
目の前にはハラスメントコードが出ていて、OKボタンを押したら女の子が俺に対してハラスメント行為をしていると認証され吹き飛ばされるだろう。

「死ぬなんて、駄目です!」

女の子はすっとぼけたことを言い、上目遣いで俺を見つめてきた。

不覚にもドキッとしてしまったが女の子は勘違いをしている。
多分、湖の前でずっと座っていた俺が急に立ち上がり、飛び込んで自殺するとでも思ったのだろうか。

「ちょっと考え事をしてただけだから大丈夫」

戸惑いながらも必死に言葉を搾り出す。
その言葉を聞いて女の子は安心したのか、抱きついている状況を把握してすぐさま俺から離れた。
小柄で身長は百五十センチの半ばくらいだろうか。上にはスチールの軽装備をしていて、下はレザーパンツ、すねまであるブーツをはいていて、その上からフード付きのケープを羽織っている。
顔を見ると、少々幼く見える、綺麗と言うよりもかわいいがとても似合っていて、タレ目が特徴的だった。

「そっ、そうですか・・・・・・すみません。はじまりの町で自殺者を目撃してしまってちょっと過敏になってたかもです」

さきほどの真っ赤な顔と打って変わってしょんぼりとした顔になった。

「それじゃあ、また」

勘違いをして恥ずかしかったのか、すぐさま立ち去ろうとする女の子を呼び止める。

「ちょっと待って。君の腰にあるのって片手剣だよね、もしかしたら《森の秘薬》クエストを受けるのかな?」

女の子は呼び止められたことにちょっと驚いたようで、すこしびっくりした顔になっている。

「そうですけど。もしかして私と一緒でβテスターの人ですか？」

「いやっ、違うけど。良かったら一緒にどうかなーって」

恥ずかしさ半分、ちゃんとした会話ができることに対する嬉しさ半分だったが、彼女も落ち着いたのか視線は耳のほうへと向けられていた。

女の子は少しうつむき、考える。数秒した後に顔をあげると笑顔で。

「よろしくおねがいします」

と、ぺこりと頭を下げた。

多分、効率のことを考えていたんだと思う。ソロの方が効率的だったり、稼ぎが多かったり。もちろん足手まといがいなければパーティー効率とあまり変わらない、と情報サイトには載っていた。

「それじゃあ、えーと・・・・・・」

自己紹介をしておらず、名前が分からず言いよどんでだ俺を察してか。先に自己紹介をしてくれた。

「ルサリィっていいます。片手剣と盾持ちのアタッカー兼タンクです。名前は呼びづらかったらのでルサって呼んでください」

最後に満面の笑み。予想以上にかわいく、テンパって目を合わせられない俺はうつむき加減で。

「名前はクリスです。短槍使いのアタッカーで呼び方は好きに呼んでください」

焦ってしまい、大分ぶっきらぼうになってしまったが、ルサは満面の笑みを浮かべ続け。右手を差し出してきた。

「よろしくねっ、クリス君！」

「よろしく、ルサ！」

ようやく、人の温かさを感じたことで何のためらいも無く、ルサと握手した。

データとはいえ、初めての女の子の手を握った感触は暖かくて細いがとても柔らかかった。

アニールブレード

村の奥にあった民家でクエストを受ける。
クエスト名は《森の秘薬》。
内容だが、自走捕食植物《リトルネペント》からドロップするアイテム《リトルネペントの胚珠》を探し出すというものであった。
普通のネペントからはドロップせず、花つきのネペントからのみドロップするアイテムで、花つきの出現率は一パーセント。
それと同じ確率で、実付きのネペントが出現するが、それは罠であって実に少しでも攻撃してしまうと、爆発し周囲に仲間のネペントを集めるという特性がある。
気になる報酬は片手用直剣《アニールブレード》で強化をしながらであれば三層の迷宮区近くまで使える結構な武器らしい。
ルサの装備は片手用直剣であった為に必要不可欠な武器であった。
俺の装備は短槍であったために必要ではなかったが、良い値段で売れると情報サイトにあったため、クエストを受けることにしていた。

「クリス君！作戦を考えましょう」

ネペントが湧く狩場まで歩いている途中にルサが話しかけてくる。

「えーと、実付きが出た場合にどうします？」

ルサがちょっと困ったような顔をして、首を傾げる。
βテストの時に嫌な思いでもしたのだろうか。

「まあ、逃げるのが得策だと思うけど……」

と、俺が思いついた最良の手を提示すると。

「クリス君、ナンセンスです！　いかに難しい敵を工夫して倒すかがゲームの醍醐味じゃないですか！」

　何をいっているのかさっぱり分からなかった。
　普通のゲームだとその楽しみ方はありかもしれないが、このゲームは死ぬかもしれないんだぞ。

「このゲームの死は現実の死となる可能性があるんだぞ。逃げるのが最良の選択じゃないのか？」

　少しむっとした表情で答える俺を尻目にルサは笑いながら。

「だからそのための、作戦会議です！」

「まずはその耳栓の理由を教えてくれませんか？」

　やはり、耳栓のことは気になっていたらしい。
　そりゃ耳栓と言うアイテムは音を遮断するアイテムでプラスの要素は全く無い。
　俺自身もそんなものを付けている人がいたら聞いてしまうことだろう。

「もしかして、もしかすると。縛りプレイですか!?」

　急に何かを思い出したかのようにはっとなり、尊敬のまざなしで俺を見つめてくる。
　縛りプレイとは、ゲーム内で回復禁止や魔法を制限しながらプレイすることをいう。もちろんしたことは数えられるほどしかないが。

「いやっ、そんなもんじゃなくて。俺ってフルダイブ不適合者なんだよね」

と、言うとルサは少し曇った顔になった。
そりゃ、誰でも足手まといとはパーティーを組みたくないか……。

「フルダイブ不適合ですか……。どういった障害が起きてるんですか」

ルサはちょっと心配そうな目をしながら一直線に俺の目を見てくる。

「見てわかる通りに、五感の中の《聴》の部分に異常があってね、聞こえすぎちゃうから耳栓をしてるんだ」

ルサはそれを聞くと少し安堵した様子を浮かべた。

「それは、耳栓をすれば普通の大きさで聞くことが出来るようになるんですか」

「うん。人よりかはちょっと大きく聞こえるけど」

「じゃあ、外せばめっちゃ遠くの音が聞こえたりします？」

「もちろん、足音だけだったら百メートル先までわかるよ」

途端にルサが考え出し、うーん。やら、ほーん。などと唸っている。
唸ること数秒、

「それってすごくないですか？」

ルサは悩んでいたことを忘れていたかの様な、うきうきとした態度で顔を近づけてきた。

「百メートル先の音が聞こえる何てチート級じゃないですか！　それなら索敵スキルを取らなくても良いってことですよ」

「あっ！　確かに……」

俺では考えしなかった発想だった。確かに俺には敵の位置が分かるし、大雑把に数も分かる。

しかも、最初に埋められるスキルスロットはたったの二つで、基本的には自分の使う武器と、もう一つのスロットには《索敵》か《隠蔽》のどちらかを取ることが多い。

俺自身は、投剣がかっこよかったため一つのスロットに埋めたが。《索敵》か《隠蔽》のどちらかに変えようと思っていた。

「じゃあ、私の索敵スキルいらないね。消去！」

俺が停止するよりも先にルサは索敵スキルを消去し、慣れた手つきでウィンドウを滑らし、空いたスロットに《軽金属装備》セットする。

「ばっ！　何やってんの!?」

焦った俺は柄にも無い声を出してしまう。

ソロでもっとも大切なスキルの一つが《索敵》で、経験地効率が上がるだけでなく、《索敵》スキルを持っていない俺はホルンカの村でプレイヤーに声をかけていたのだ。

そのため、《索敵》スキルは生存率にも大きく影響を及ぼす。

《索敵》スキルを消す、と言う事はソロを捨てるという事と同意義なのだ。

「ふえっ！」

俺の声にびっくりしたのか、ルサも変な声を出す。

「だって、いらないよね……」

と、不思議そうに俺の顔を覗き込んでくる。

「確かに今はいらないのかもしれないけど、ソロに戻れなくなっちゃうよ」

ルサははっとしたような顔をして、泣き顔へと変化していった。

「これから先はソロとグループを組む奴に分かれるだろうし、はっきりと分かれてしまったならグループに入るのは少し難しいよ」

追い討ちをかけると、ルサは本当に困った顔になるが、次第に明るい顔へと戻っていく。

「じゃあ、クリス君が私とグループになっちゃえばいいんだよ！」

ルサはまたもや、すっとぼけたことを言い出した。
俺が？　こんなかわいい子と、これから先もグループ組む？
それは、それで魅力的なことだが、こんな俺でもいいのだろうか……。

「フルダイブ不適合の俺でもいいの？」

「全然構わないよ！　むしろ頼もしいよ。クリス君っ！」

ルサはまたもや笑顔に戻る。

「それじゃあ、話しがぐーんと戻るけど」

ルサは実付きのネペントが出た際の作戦を話し出した。

リトルネペント

狩りは十分すぎるほど順調に進んでいた。
一時間ですでに、花付きネペントを一体倒し、実付きも出ていない。
ルサと俺は別々に狩ってはいるがどちらもピンチになったら、すぐに駆けつけられる位置だ。
花付きはノーマルを倒せば倒すほど出現率が上がるらしく、俺たちはグループを組みながらも別々に狩ることを選択した。
と、は言いつつも。どちらもピンチになったら助けられる距離を保っているし、声も届く。

「クリス君ー、次はどこー！」

ネペントを倒したルサが十数メートル離れた先で叫ぶ。
一応、狩りを分担をしているが索敵スキルのないルサは、ネペントを一体倒すごとに聞いてくる。
現在、ネペントと戦っている俺にとっては至極邪魔なのだが、仕方無しに攻撃の合間を耳栓を外す。

「左の方向に一体湧いてるっ！」

ネペントが吐き出す腐蝕液を避けながら叫ぶ。

「了解ですっ」

ルサの声を聞きながらも、腐蝕液を出したことで硬直しているネペントに対して攻撃を仕掛ける。
ネペントの弱点である、ウツボ部分と茎の接合部分に槍を突き刺す。
一度離れてから、様子を見る。

先ほど攻撃したぶんと、今の攻撃で残るＨＰは約四割。
ネペントはウツボを膨らます。腐蝕液発射の予備動作。射程も長く、しかも早い。当たってしまうと装備の耐久力が減るうえに、粘着力によって動きが制限されてしまう。
もちろん、分かっていて避けることがそこまで難しくないが、油断できるほど甘くは無い。
腐食液を横に回転しながら避けると同時に槍を投げる。
ウツボ中心部分に当たる。弱点ではないものの、四割近く残っていたＨＰは無くなり砕け散る。
いま、倒したので四十四匹。最初の数体で花付きが出てきたことは幸運であったが、それから全く出てきていない。
そろそろ二体目の花付きが出てきてもおかしくないころだが、と思っていた矢先。

「クリスくーん。花付き見つけたよー」

相方の緊張感の無い声が聞こえた。
後ろを振り返ると、現在交戦中のルサの姿が見えた。
腐蝕液を避けながら、的確に攻撃を当てていく、俺の戦いとは違い無駄なところが一切無い。さすがβテスターといったところか。
花付きのＨＰを半分近く削ったところで、ルサが戦っている木の陰からネペントが現れた。耳栓外して周囲確認を忘れていた俺は焦った。
ルサも気がついたらしく、一旦花付きから離れる。

「クリス君っ、フォローお願いします！」

ルサはそれほど焦ってはおらず、的確に指示をだしてくれる。
おかげで、俺も冷静になり、ショートスピアを握りしめる。

「了解！」

投剣スキルの《リサールショット》を放つ。
外れはしなかったものの、狙いははずれＨＰは一割しか削る事はできなかった。
しかし、いま大切な事は敵に大きなダメージを与えることではなく、タゲを取ることだ。
ネペントは怒りの声を上げながら、根をうねうねとうならせながら近づいてくる。
俺は腐食液がぎりぎり届かなく、タゲが外れない程度の距離を保ちつつ、ルサからネペントを離していく。
ネペントの後ろで、とどめを刺すルサの姿があった。
それと同時にネペントの射程範囲に入る。
腐蝕液を吐き出してくるが、避ける。すぐさま《プリック》を発動させ、弱点を攻撃する。
攻撃を受け、ノックバックしたネペントから距離を置いた瞬間。ネペントの後ろに赤く光る一線が見え、先ほど攻撃した弱点をなぞる。残るＨＰの四割近くを消し去った赤い線の名前は、片手剣水平斬撃技の《ホリゾンタル》。もちろん放ったのはルカであった。

「これでクエスト完了だね！」

無邪気な笑顔を見せる。
釣られて俺も笑ってしまう。
死を隣合わせだった戦闘を終え、安堵したときに木陰から一体のネペントが現れた。
普通であったら、何のためらいもなしに臨戦態勢を構えていたが、状況が違った。

「実付きだ」

俺がそう言うと、ルサは多少驚いた顔をして実付きのほうを向く。

「クエストも完了したし、構うこともないから逃げよう」
先ほど投げた槍を回収しつつ、実付きの逆方向へと歩き出そうとした瞬間、手を握られ引き止められた。
「待ってくださいっ」
さすがにクエストが終了した今。倒す理由もない実付きを倒そうとする人は一割もいないだろう。
しかし、ルサはその少数派であった。
「でもなぁ。花付きと違ってレアドロップもないし、経験地もノーマルと変わらないはずだよ」
俺がそういうと、ルサは困った顔をしたが、一直線に俺の目を見つめ。
「そうかもしれませんが……それでも、私倒したいですっ！」
見つめられると、照れてしまいうまく対応が出来なくなってしまう。
それに加えて、今までのネペント狩りが順調すぎて天狗になっていたこともあり、倒すことを了承してしまった。
「とりあえず、作戦通りで動いてください。少しでもやばいと思ったら撤退で」
撤退のこともちゃんと考えている、完璧な作戦であった。
もちろん、ルサの目を見れば撤退するなんて考えられないほど、生き生きとした目だが。引き際はしっかりと分かっているだろう。

「準備は良いかな」

ルサが今にも飛び出しそうな前傾姿勢で問いかけてくる。

俺は無言で頷いた。

「それじゃあ、作戦開始だよっ！」

待ちきれなかったのか、叫び声よりも先に駆け出して行った。

俺は後ろからルサを見守る。

植物系などの目を持っていないモンスターには先制攻撃はしずらくなっている。

ネペントも例外ではなく、ルサが駆け出した瞬間にこちらに向かって臨戦態勢で構えている。

ルサが腐蝕液射程圏内にはいると、実付きはウツボを膨らませ液を発射させる。

慣れたステップで避けると、同時に刺突攻撃で弱点を的確に突く。

それは作戦の一つで、切るに対して刺す動作だと当たる面積が小さく、実にも当たりづらい。そのため剣の切る動作を捨て、半ば無理やりに刺しにいったのだ。

攻撃を受けた実付きは仰け反る。

それを待っていたかのように、持っている槍が青色に淡く光りだし、俺の右手から放たれる。

仰け反り《ノックバック》で動けなくなっている最中での投げ攻撃には補正が入り、当たりやすくなっている。

そのため、先にルサが突っ込み、ノックバックをさせてから投剣での攻撃だったはずなのだが弱点から外れてしまった。

完璧な作戦であったが、実付きのＨＰは三割も残っている結果となった。

最初の一撃、そして俺の二撃目。それで倒せなかったら逃げるという段取りであった。

「ルサ！　引くよっ！」

俺が叫んでもルサは見向きもしなかった。
ノックバックから回復した実付きは、ツルを操ってルサに攻撃をしかけている。
ツルでの不規則な攻撃に、ルサは必死に戦い続けている。
どうやら俺の声は届いていないらしい。
これはもう、作戦などとは言ってられず、ルサへ向かって走り出す。
ツルの攻撃を何とか凌ぎきったルサは一旦、実付きと距離を置いた。

「ルサ……逃げよう」

ルサに近づいて説得を試みるが、ルサの目は一直線に実付きの方へ向けられている。

「私、実付きを倒したいです」

「なんで、そんなに拘るんだよ！」

声が荒くなる。

「私はβテストの時にソロで実付きに何度も挑みました。その時の勝率は五割弱しかなかったです」

ルサは悔しそうな顔をしている。
実際に悔しかったのだろう。だから、こんなにも固執し続ける。

「しかも、ここは森の比較的浅いところです。もし、ソロの人が間違えてタゲを取ってしまったらどうするんですか！」

ルサも声を荒げながら続けざまに言う。

「全部何て無理なのは承知です……でも、目の前にいる問題を見逃すわけにはいきません」

荒げていた声が次第に泣き声に変わっていく。
そんな姿を見せられたら男として。いや、相棒として頑張らない訳には行かなかった。

「ルサ。前衛をお願いしていいかな」

俺がそう言うと。

「はいっ！」

ルサが笑顔で元気の良い返事が返ってきた。
やっぱり、ルサは笑顔のほうが似合うよ。と、心の声を口にすることはなかった。

実付きのネペントに向かって構えなおす。
油断をしなければ、勝てない相手ではないはずだ。
新たにゲットした、《スチールショートスピア》を装備し、集中する。
ルサが走り出す。それを追う形で俺も走り出した。
ツルの攻撃を盾で弾きながら、俺のために道を作ってくれている。
実付きのウツボが膨れ上がったが、ルサは一直線に進み続ける。
放たれた腐食液を盾で受け止める。ジュゥゥゥと何かが溶けていく音が聞こえる。

「うっ……」

ルサが苦しそうにするが、構わず走り抜ける。
硬直している実付き目掛けて、複合槍単発刺突技《スペック》を放つ。
祈るように、槍の矛先を突き出す。
願いは届いたのか、見事弱点に命中し、実付きのネペントはガラスとなって崩れ去っていった。

ホルンカの村出発

「今日の反省点だけど」

　俺とルサは現在ホルンカの村にある《鳥の尻尾》と言う名のレストランで反省会を開いている。
　目の前には黒パン、オニオンのスープ、サラダといった質素な食事が並んでいる。
　ルナは実付きのネペントを倒した時は喜んでいたが、帰り道からずっと落ち込んだ表情のままでいる。

「とりあえず、実付きを作戦通りに倒せなかったところで引くべきだったと思うんだ」

　暗い表情のままでいられると、こちらも暗い雰囲気になってしまうため、そこまできついことは言えずにいた。
　涙を浮かべながらルサはこちらを見る。

「でもでも、あのままだったら他の人に迷惑が掛かっちゃうと思ったし……。それに、私たちがあそこで乱獲をしてたせいで湧いたってことも考えられるし」

「そうかもしれないけど……」

　確かに、俺たちがあそこでネペントを倒しまくったせいで実付きが湧いてしまったということもあるだろう。
　しかし自分たちの命をかけてまで倒すべきではなかっただろう。と俺は考えていた。
　もちろん、花付きを探している最中に見つけてしまったのならばしょうがないが、クエストアイテムが揃え終わったにも関わらず、挑

みに行くのも可笑しな話しだ。

「それに、クリス君と一緒なら倒せるって思ったんだもん」

ルサは上目遣いで俺を見る。

「そっ、そうなんだ……」

照れ隠しで黒パンを一口食べる。予想以上の硬さに顔をしかめるが、よく噛むと小麦本来の味がしてなかなか美味しい。

「うん」

ルサも黒パンを一口かじるが、俺と同様にしかめっ面をする。想像通りの反応に少し笑ってしまった。

「えっ、なんで笑ったの？」

ルサは急に笑った俺を見て、不思議にそうに首を傾げた。

「いやっ、黒パンが硬くてしかめっ面をするリサが想像通りだったからさ」

ちょっと慌てているルサを見て、笑いがこみ上げてきた。

「だから、さっきクリス君もしかめっ面になったのか。怒ってるのかと思ったよー」

ルサも少し笑いながらパンをもう一口食べる。

「怒ってるって言ったら、怒ってるんだけどさ」

言いかけている途中でルサはどんどん暗い顔になっていく。
俺は慌てて、その場を取り持つ。

「まあ、二人とも生きていたわけだし、結果オーライと言うわけで」

あまり、暗い顔は見たくなかった。

「それでも、今日みたいな無茶は今後無し」

一応、釘は刺しておく。
こんなのを続けていたら、いつかは絶対に勝利の女神に突き放されることだろう。
このゲームの死は、現実世界での死と繋がっていることに確信は持てないが、用心にこしたことはないだろう。

「りょうかいしました！」

元気のよい返事が返ってくる。
やっぱり、笑っていたほうがルサらしい。

「それじゃあ、今後はどうしよっか？」

オニオンスープを飲みながら、ルサに質問する。

「んーと、このあたりは明日になると人でいっぱいになっちゃうと思うから、次の村へ行こうかなって」

「そうだね。人も増えればモンスターの取り合いになるだろうし」

現在、俺とルサのレベルは5にあがっていた。

このあたりのモンスターはすでに簡単に倒せるようになっていて、そろそろレベルを上げるのはきつくなってくるだろう。
明日になると人も増え、モンスターの取り合いになる。
それより先に、次の町へ行こうという提案だった。

「それじゃあ、次の行き先は《カルン》の村でいいのかな」

「そうだねー。盾も新調したいし、あそこに良いバックラーがもらえるクエストがあるから、それを取りに行こうかなって思ってるんだけど」

《カルン》の村とは、ホルンカよりも小さな村で家も数えるほどしかない。
雑貨屋、宿、それと装備のメンテナンスのみの鍛冶屋があるのみで、お世辞にも狩りの拠点としての機能を十分に果たしているとは言いがたい。
ないものねだりはしてもしょうがない。
いつの間にかに夕食を全部食べつくしていた俺たちは明日の朝、八時に出発することにし、別々の部屋へと入っていった。

ベットへ横になる、今日一日がとても長く感じたように思えてならない。
現在、時刻が午前一時。ゲームを始めてからたった十二時間しかたっていない。
考える事は一つであった。このゲームのことだ。
何で？　どうして？　この世界を作った理由が知りたかった。あいにく俺は、ゲーム雑誌を読むタイプではなかったため、茅場晶彦のことなんて名前くらいしか知らない。
インタビューでも見ておけば考える材料になったのかもしれない。
この世界の死は、本当に現実世界の死となるのか。それが一番知りたかった。

耳からではなく、頭の中でアラームが聞こえる。
起きると時刻が七時半。少々ギリギリかと思えたが、ＳＡＯ内では用意に要する時間は現実世界の一割程度で済んでしまった。
寝癖もなく、歯を磨くことさえなくてもよい。服を着替えるのもウィンドウにタッチするだけだ。
用意を数分で終わらせた俺は、雑貨屋や装備屋に寄って、荷物の確認や武器のメンテナンスをしていた。

「おはようございますー」

後ろから寝ぼけた声がした。
朝から俺に話しかける人は、いまこのゲーム内でたった一人だろう

「おはよう、リサ。」

振り向きながら言うとそこには、目を擦っている相方の姿があった。
いつも通りの軽金属の鎧にレザーパンツ、すねまでブーツに新しく買った銅の盾とクエストの報酬品の《アニールブレード》。

「いつも、思っていたんですが。アニールブレードの形ってセンスないですよね……」

落ち込みながら言う。確かにかっこよくはない。
しかし、性能面では現在手に出来る武器の中でトップクラスを争うレベルの強さだ。

「これを第三層まで使い続けるとか、狂気の沙汰ですよ……」

ルサは鞘から直剣をを抜き取り、うらめしそうに眺める。

「まあ、一番強い武器なんだからしょうがないよ。とりあえず、第三層まで我慢すれば愛着が湧くかもよ」

俺が言うと、ルサはこちらを見て。

「そうですね。とりあえず、第二の相棒として大切にします」

ルサは持ち前の明るさで何とか持ちこたえる。
最後に二人で荷物確認をする。
回復ポーションと解毒ポーションはアクティブ化して、ポーチの中へしまう。
槍もしっかりと耐久度を調べる、昨日で大部減ってしまったが、先ほどメンテナンスをして今では最大値になっている。
昨日、腐蝕液をモロにかぶってしまったルサの盾だが、ドロドロになった挙句に耐久度はゼロになってしまった。
メンテナンスで直す事は可能であったが、新調することにしたらしい。
各自の点検を終えた俺らはホルンカの村を出発した。

カルンの村

ホルンカの村の《北の森》を抜けると、小さな《カルン》という村がある。
その村にある、《ホワイトタイガーの群れ》というクエストがとにかく経験地効率がよい。
そのクエストは殺戮系クエストといい、モンスターを何匹倒してほしいなどといった内容だ。
人がたくさんいると、モンスターの奪い合いになることが多いため、人があまりいない今が最大の好機といえる。

「最初に受けるクエストの話しなんですけど」

森の中を歩いている最中にルサの口が動く。

「クエストモンスターの《ホワイトタイガー》は攻撃力が他に比べて高く設定されているんですよ」

もちろん、そのことは知っていた。
《ホワイトタイガー》の強攻撃を食らってしまうと、レベル５の俺たちであっても軽装備では二回の攻撃でＨＰがゼロとなってしまうだろう。
そのために、ネペントとは違い、別々に狩りをするのは得策ではない。

「そこで、連携をとって狩ろうと思います」

ルサもそう思っていたらしく、パーティーでの狩りを提案してきていた。
もちろん断る理由もなく、了承する。

「そういえば、クリス君ってスイッチって知ってる？」

スイッチとは確かパーティー狩りの際の作戦の一つだった記憶がある。

もちろん、ルサと会うまでソロで戦っていた俺は実践した事はなく、情報サイトに載っていた記事を読んだだけなので詳しくはわからない。

「知ってるけど、実践をした事はないんだ」

正直に答える。

ここで、見栄をはることに意味はないだろうし、はるほどのプライドも持ち合わせていない。

「そうなんだっ、じゃあ現地に着いたら教えてあげるね！」

何故か、ルサがご機嫌になったような感じがした。少しだけだが歩く足でリズムを取っている。

まあ、ルサにレクチャーしてもらうのも悪くはない。

「クリス君っ、スイッチ！」

ルサが右手にある剣でホワイトタイガーにソードスキルで攻撃を仕掛ける。

剣が赤く染まり、宙に軌跡を描く。

ソードスキルを真正面から受けた《ホワイトタイガー》は反動で後ろへ仰け反る。

その硬直時間を使い、ルサが後ろへと引き、俺が前衛となる。

簡単に言うと、これがスイッチと言う技法だ。もちろん簡単ではな

く呼吸の合ったチームプレイが大切である。
ホワイトタイガーはこれで十匹目。スイッチのタイミングも掴めてきていた。
ノックバックが終わらない間にソードスキルを放つ。
短槍専用単突技《オーバーポイント》、威力は少ないが、それを補っても余るくらいの速さを持っている技だ。
弱点を突いたが、先ほどのルカの攻撃を合わせても四割ほどしか削られていない。
槍を抜き、一旦距離を置く。
するとホワイトタイガーは前のめりになる。これは突進からの噛み付き攻撃の予備動作。

「スイッチっ！」

と、叫ぶと後ろからルサが現れ，盾を構える。
ものすごい勢いで飛び込んできた白い虎を受け止め、盾が白い光を放ちながら押し返す。
盾専用スキル《パリィ》が攻撃を仕掛けてきた白虎を弾き飛ばしノックバックさせる。
それに合わせて、ソードスキルを発動させる。
槍専用スキル《ダブルスピアー》。現在、俺が出せる最大威力の二連撃だ。
白虎の首と右肩に突き刺さる。
残るＨＰは三割。
ソートスキル後の硬直が終わった、ルサが直剣単撃技《スラント》を放つ。
白虎を切り裂き、淡い青色をしたガラスへと変えていった。
俺たちがカルンの村で受けたクエストの内容は、さきほど倒した白虎の討伐であった。
数はパーティーで百匹。

《ホワイトタイガー》を倒すのはソロに向いていないため、カルンの村に来ているプレイヤーは、見た感じ俺たちを合わせてもギリギリ二桁になるくらいの数であった。
もちろん、ソロで倒すのは不可能ではない。
ソロで狩っているプレイヤーは一人いたが、その人は白虎が放つ攻撃を全て避け、弱点である首へとソードスキルを吸い込ませていた。
マネなど到底できるはずもなく、ルサと協力して一匹、一匹を着実に倒していった。

「これで九十九匹目っ！」

ルサが剣を振り降ろす。
白虎は弾け飛んで消えていった。
現在の時刻は午後六時、空は夕日で赤く染まっている。
一度お昼休憩、兼アイテム補給で村へと戻ったが、それ以外はほとんど狩りに費やしていた。
狩りをし始めておよそ七時間で上がったレベルは1のみで、最初と比べ極端にレベルは上がりにくくなっている。
それでも、着実に経験地バーは伸び、強くなってく実感が出来る。
それを励みにがんばることが出来ている。
あとは、元気に剣を振りまくっているお隣さんのおかげかな。

「最後の一匹っ！」

ルサは凄まじい速さで再ＰＯＰした、白虎に飛び掛っていった。
ツメの攻撃を避け、突進を弾き返し、噛み付き攻撃を盾で受け止める。
その合間を縫って攻撃を仕掛けている。
白虎のＨＰが残りわずかとなるが、一度も前衛を交代していない。
と、言うよりも入っていけないほうが正しかった。
最後の一撃を振りかぶったルサの表情は笑顔だが、とてつもなく怖

い。表情と行動のギャップが激しかった。
白虎が最後の一撃をくらい、消え去ると同時に鈴がなる音が聞こえる。クエスト完了の合図だ。

「ルサ、お疲れ様」

最後の一撃に勢いをつけすぎたのか、尻餅をついているルサに水を渡しながら、労いの言葉をかける。
ルサはこちらを見て、照れた笑いをして、起き上がる。

「ありがとっ、こんなに早く終わったのクリス君のおかげだよ！」

そんなことはない、攻撃の手数は一緒であったが、守りはルサが一人で行なってくれていた。
どっちかと言うと、足手まといだった気がする。

「十二時間っ！」

俺の顔を見て、ルサが突然大声を出した。

「どっ、どうしたの？」

びっくりする俺を見ながら、先ほど渡した水が入っているビンの栓を開ける。

「私がソロで《ホワイトタイガー》を百匹倒すのに掛かった時間だよ」

ルサはにっこりと暖かな笑顔を見せながら。

「クリス君は足手まといなんかじゃないよ。おかげで五時間も短縮できたんだもん！　ありがとね」

目に涙が溜まりそうになるのを押さえ込む。
涙を見せるわけにはいかない。男として。

「こっちこそありがとう」

と、言うと。
満足そうに頷きカルンの村へと歩き出す。

「それじゃあ、クエスト完了しに行こっ。クリス君！」

振り向きながら満面の笑顔を見せてくれる、ルサに感謝をしながら、同じように笑いながら一緒に歩き出す。
今日の夕飯は少し豪華にしようと心に決めた。

初めての迷宮区

「ここが迷宮区か……」
ソードアートオンラインが開始され、三週間がたった今日。
今まで見ることしか出来なかった塔の内部に、ようやく入ることが出来た。

「懐かしい感じがするなー」

隣にいるルサは鼻をヒクヒクさせ、塔内部の匂いを嗅いでいる。

「匂いでわかるものなの？」

少し気になったためルサに聞いてみる。

「んー。雰囲気かな」

匂いを嗅いでいるところを見られて少し恥ずかしかったのか、首を横に傾け、はにかむ。
深呼吸をする。
確かに外にいたときよりも、空気が濃い気がしないこともないが。

「やっぱりわからない」

「えへへー。そうだよね、実は私もよくわからなかった」

一緒になって笑い出す。
今までで一番危険な場所に向かうにもかかわらず、俺とルサは平常

運転だった。

ゲーム開始から三週間が経ち、現在の俺たちのレベルは８へと上がっていた。

レベルの高さでいうと、トップクラスになっていて。それ以上の人はほとんどいないと言ってもいいほどになっていた。

ゲームからの脱落者は千五百人は越えていると、情報を耳にする。このペースでは５層近くで止まってしまう可能性があると指摘されていたが、時間が立つにつれ退場する人の数も徐々に減っていった。

「前方に足音が聞こえるよ」

耳栓を外している時には、俺たちは一切話さない。

音が聞こえなくなるためでもあるが、耳栓を外していての会話は難しいからだ。

そのため、ルサが耳栓を付けるようにとジェスチャーをしてきたので、耳栓を装着する。

「えっと、多分ここらへんのモンスターはほとんどが《コボルド》だと思うんだけど、対処の仕方はわかるかな？」

迷宮区の亜人型モンスター《ルインコボルド・トルーパー》。通称コボルド。

武器は斧を使ってきて、敵がソードスキルを使ってくるようになるのはコボルドが最初だ。

攻撃力も高く、そして素早い。ソードスキルは自分にとっては頼りになるが、相手が使ってくるとなると凄まじい脅威だ。

一応、情報サイトに対処法はいくつか載っていたが、あまり記憶には残っていなかった。

「ごめん、ちょっとわからない……」

と、言うとルサはひそひそ声で。

「えっと、肩に斧を乗せたらソードスキルの発動の予備動作だから、クリス君が前衛の時はすぐさまスイッチ。私が前衛の時はそのままで」

ひそひそ声をする必要はないだろうが、迷宮区の薄暗さや敵が近くにいる緊張感が合わさって雰囲気的に声が小さくなっているのだろう。

「うん、りょうかい」

「それと分かってるかもだけど、ソードスキルを受けきったらすぐさま攻撃を仕掛けてください」

俺も釣られて声が小さくなってしまう。

少しだけ面白い出来事だったが、いまは目の前の問題を片付けるのに専念しよう。

「大丈夫」

頷きながらルサのほうを見る。

若干、久しぶりの戦闘らしい戦闘に心なしかうきうきしているようにも見える。

「それじゃあ、私が先頭で最初の攻撃はクリス君の投剣でよろしくお願いします」

その言葉を聞き、頷くと満足そうな顔を浮かべる。

ルサが走る体制になり、カウントダウンをし始める。

「3、2、1、ごー！」
ルサが走り出す、続いて後を追うように俺も走り出した。
数メートル先にコボルトが見える。
持っていた《ショートスピア》が光だし、閃光となって放たれる。
強化内容に《正確さ》を加えた、自慢の槍はコボルトに命中し、少しのノックバックを発生させる。
続いて、ルサの剣が赤く光る。
ノックバックしている、無防備なコボルト目掛けて直剣水平二連撃《スネークバイト》を発動させる。
目にも留まらぬ速さでコボルトを左右交互に切る。
雄たけびをあげるコボルトは肩に斧を乗せる。
作戦通りそのままルサが盾を構えて受けきると、硬直時間が生まれる。
その隙にソードスキルを発動させ、コボルトに突き刺す。残りＨＰは三割弱。
ルサのソードスキルで縦に一閃。コボルトは砕け散り経験地とドロップ品が写ったウィンドウが開かれた。

コボルトを倒したり、隠し部屋を探したり、地図をマッピングしている間に午後六時となっていたため、急いで町へと帰る。
βテストとあまり隠し部屋の場所が変わっていなかったため、今日のもうけは大きい。
基本的にもうけは半分にする。ドロップ品は双方のどちらかが必要であったなら、そちらに譲るという形になっている。
反省会をするため、レストランに入り、いつも通りに黒パン、サラダ、スープと大きなグラタンを注文する。

「あのですね」
注文を頼み終えたところでルサは話しかけてきた。

「ドロップ品も貯まって来たので売却したいと思うんですけど」
今日の戦利品が多かったため、アイテム蘭はほぼ満タンになってしまっている。
「普通にNPCに売っちゃえばいいんじゃないかな」
いつも通りの処理の仕方を提案すると。
「それでも、いいんですが。コボルトのドロップ品は斧の強化素材になりますし、装備もプレイヤー同士で売ったほうが高く売れると思うんです」
俺が確かに。と頷くと続けて。
「装備とかがプレイヤーの市場に出回ると攻略も早くなっていきますし」
NPCに売った装備やアイテムは自動的に消去されてしまうが、プレイヤー同士の売買はそのかぎりではない。
自分が売ったアイテムは市場に出回り、そして誰かが装備する。
そのおかげで装備を無駄にすることがないため、攻略のスピードも上がってくる。
理想は全てのアイテムをプレイヤー同士で売買することだ。もちろん出来るわけがないが。
今までそうしなかった理由は商売をするプレイヤーがいなかったのだ。ほとんどのプレイヤーが狩りへと足を運んでいったため、NPCに売ることしか出来なかった。
ゲーム開始から三週間たった今では商売をしている人も増えてきている。

「そうだなー。じゃあ、明日売りに行こうか」

ルサはその言葉を聞き、喜ぶ。

「ではでは、始まりの町に戻りましょう。今はあそこが一番プレイヤーの数が多いですし商売しているプレイヤーはあそこを拠点としているらしいですよ」

「でも、戻るとなると。一日かがりになっちゃわない？」

ルサの勢いは止まらず少し早口になりながら畳み掛けてくる。

「そうなっちゃいますが、やっぱりそうしたほうが世のため人のためですよ！」

ルサと目があうと，不自然に視線を外された。
このときのルサには二通りの可能性がある。一つはうそをついていること。もう一つは言っていることの裏に何かがあること。
この場合に前者はないため、後者となるだろう。

「つまり、休暇が欲しいと」

俺がそういうと，びっくりした顔になる。

「えへへー。ばれちゃいましたか」

ルサは照れ笑いをする。
確かに今までノンストップで狩りを続けていたため、この世界を楽しむことはしていなかった気もする。

「そうだね、明日の狩りは中止にしようか」

俺自身も少しこの世界をじっくりと見たかったため、同意することにした。

途端にルサが立ち上がり、ガッツポーズをした。

「やったーーー!!」

周りを気にせず叫ぶルサを抑えながら、明日のことを考え、少し楽しみになってきた俺がいた。

一休み・前編

《始まりの町》は中世のヨーロッパを意識した作りとなっている。
美しく整った町並み、レンガ造りの建物。どこを見ても美しいと感じざるを得なかった。

「クリス君。口が開きっぱなしだよ」

隣にいるルサが口元に手を当て笑っていた。
どうやら景色に見とれて口が開いてしまっていたらしい。

「始りの街をこうやってじっくり見るのは初めてでさ」

頭を掻きながら照れ隠しに少し笑ってしまう。
現在、俺たちは始まりの町の北西ゲートにいる。ここから主街区に向かって歩き、大通りの商店街へと行く予定になっていた。

「そうなんですか」

ルサが少し驚いたような顔をする。

「最初に来た人はほぼ全員が観光してると思っていたので」

と、補足を加えてくる。

「俺も観光したかったんだけどね。それよりも先に耳栓を手に入れないといけなかったから」

俺にとっては何気ない一言であったが、ルサの表情を見る限り誤解をしてしまったらしい。

もちろん始まりの町を観光したくない事はなかったが、する暇がなかったし、そこまでの余裕も生まれていなかった。今がいいチャンスだろう。
ルサも同じようなことを思いついたらしく。
「一日余ってますし、観光しながら歩きましょうか。私、結構詳しいので案内しますよ」
気を使ってくれているのがとてもよくわかった。
ここは遠慮せずにその提案に乗ることにした。
「ゲートを抜けて見えて着ますのが、主街区であります」
観光バスにいるガイドの物真似をしながら案内してくれるらしい。
少し苦笑いをしながら後ろへ着いて行く。
「そして右手には大きな時計塔が建っています」
右を見ると大きな時計塔が建っていて、主街区の象徴となっている。
時刻は十二時になったばかりであった。
「ここの路地裏の先には……」
ルサが少し小走りで路地裏に入って行き、慌てて後を追いかける。
路地裏に入ると、ルサが道のど真ん中に立っていて、後ろにある一つの看板に指をさす。
「あちらが私のお気に入りのレストランとなっております」
ルサは満面の笑みで見つめてくる。

してやられた。と思いながらも、笑顔に釣られ俺自身も笑ってしまう。

「それじゃあ、お昼にしよっか」

と、提案すると。

待ってましたと言わんばかりにルサは店の前まで走っていく。

「早く早くー」

ルサが手招きをしてくる。

苦笑いをしながらも、ルサの元へ走って行った。

「おいしかったー」

ルサが満足げな声を出す。

確かに味にうるさいルサのお気に入りなだけあり、料理はとてもおいしかった。その分だけ値段も高かったが。

サラダから入り、シチューやステーキ。皿いっぱいに盛ってあるミートソーススパゲッティはゲーム内で食べたどの料理よりも美味しかった。

しかも、デザートはベリータルトを注文したが、これまた絶品で、果実の酸味に甘すぎないカスタードクリームがすごく合っていて、俺好みの味であった。

「確かに美味しかったね」

ルサのさきほどの言葉に同意すると。

「だよねっ！　料理も美味しかったけどデザートがとっても美味しい

んだよ」
店員を呼び、ウィンドウから追加注文をする。これで四皿目。
もちろん支払いは割り勘である。
まあ、ルサの笑顔が見れるなら安い出費だ。
注文して数十秒で出てきたケーキをフォークで食べ、幸せそうな笑顔になる。
その笑顔に釘付けになっていたが、途端に目が合った。
急に視線がぶつかったため、ドギマギしていた俺だがルサのほうを一目見ると何やら考え込んでいた。
しばらく考えたすえにルサの口から出てきた言葉は。

「食べたいなら一口あげるよっ！」

少し思っていたことだが、またもや勘違いしている様子だった。ルサは俺がケーキを食べたくて見ていたと思ってしまったらしい。
フォークでケーキを切り取り、そのまま俺の口元へと運んでくる。

「はい」

ルサは自然な動作であったため、釣られて食べてしまった。
すると、ルサも気がついたらしく、顔を真っ赤に染め、照れ笑いをする。

「えへへ。アーンしちゃったね」

その言葉を聞き、俺も赤くなるのがわかった。
その後、店を出るまで気まずい雰囲気は続くのであった。

一休み・中編

「はぁー美味しかったー」
　店を出るとルサが大きな伸びをする。
「確かに美味しかった」
　ルサの言葉に同意をするとこちらを向き頷いてきた。
「でしょでしょー。あともう一軒オススメの場所があるんだ！」
　ルサは期待の目で俺のほうを見てくる。
「わかったよ。夜はそこに行こう」
　俺がそういうとルサはガッツポーズをした。
　もちろん、ルサのオススメなだけあって美味しいのだろう。
「それじゃあ、買い物を済ませちゃおっか！」
　ルサが小走りで大通りへと進んでいく、後ろから着いていく俺も多少は小走りになってしまう。
　今まで、狩りばっかりしていた俺はルサ以外の人とは話すことがなかった。
　少し他の人と話しをするのが楽しみになっていたのだ。
「いらっしゃーい！　青トカゲの肉串がたったの三十コルだよー」

最初に聞こえてきたのは露天で串焼きを売っている青年の声だった。

「あー買いますー！」

続いてルサの声。

声がしたほうに走っていくと、串焼きを四本持っているルサの姿があった。

「さっきご飯食べたばっかりなのに良く食べられるな」

苦笑いをしながら串焼きを頬張ってるルサに話しかける。

「らって、ほいひそうらったんだもん」

「おいしそうだったの？」

聞き取れる範囲で聞きなおすとルサは頷く。

「よく食べられるな」

飲み込んだときを見計らって話しかける。

「お肉は別腹ですっ！」

それはちょっと違う気もするが……。

話し終わると同時に、再び食べ始めるルサを横目に串焼きを売っていた青年に話しかける。

「俺にも一本ください」

おいしそうに食べているルサを見ていると何故か腹が減ってしまう。
「にーちゃんも腹減ったか！　はいよ三十コルな」
串焼きを売っている青年は気さくな様子で話しかけていた。
薄い茶色のシャツに緑色のベストを着ている、駆け出しの町商人と言った感じだ。
串焼きを受け取る、湯気までも再現されていてとても美味しそうであった。
「あれを見ていると腹がへるよなぁ」
町商人風の男はルサの方へと指をさす。
そちらに視線を向けると、美味しそうに肉を頬張っているルサの姿があった。
「そうなんですよ。さっき昼食をとったばっかりなんですけどね」
ルサ以外の人と話すのが久しぶりなのか、少しだけ青年の声が大きく聞こえる。
苦笑いをしながら答える。
「だよなぁ。俺も腹が減っちまったよ」
町商人風の男は自分で焼いていた商品を手に取り、頬張る。
「そら、食わんと冷めて不味くなってしまうぞ」
そう言われたので肉を頬張る。噛んだ瞬間に肉汁が溢れてくる。
トカゲの肉と言われていたからどんな味だか不明ではあったが、鶏

肉に近い味であった。

「おいしいです」

素直な感想を言うと、にこっと青年は笑い。

「だろー。プレイヤーから買ったのはいいんだが売れなくて困ってたからよ。それなら自分で料理にしちまえば売れんじゃないかっておもったわけよ」

「なるほど」

俺が相槌をうつ。身なりからして料理人じゃないと思ったのだが、その予想は間違っていなかったらしい。

「本職は商人なんだが、色んな商品を扱いすぎてなー大通りからはぶられちまったわけよ」

確かに大通りの隣の路地で商売をするのは得策じゃない、客はほとんどが大通りに取られてしまっているだろう。

商売をするために必須の《ベンダーズ・カーペット》を二枚敷いて大きな範囲を陣取っていた。大通りでもこの商売スタイルは変えていなかったのだろう。

片方に並んでいる商品は武器や防具がメインとなっていて、他にもポーションなどの狩りに出かける際に必要な物が揃っていた。もう一つは主に食糧や武器強化に必要な素材などが並んでいて、大きく買い取りしますの看板。おそらくこちらは物を買い取りがメインとなっているのだろう。

「買い取りもしているんですか？」

看板の文字が気になった俺は青年に質問を投げかける。
すると、青年の顔が少しだけ真面目な顔になる。
「やってるが、にーちゃん売れるもん持ってるのか」
あまり整った装備をしていない俺を見て品定めをしたのだろうか。先ほどの真面目な表情は見えなくなっていた。
「最前線の素材を持っているんだけどどうかな？」
そういうと、青年は少し驚いた顔になるがすぐさま笑顔になった。
「そうかそうか！　じゃあ、とりあえず見せてもらおうか」
俺の言った言葉を信じていないのか冗談まじりの声を出す。
「自己紹介がまだだったな、俺はアキンドっていう名前だ」
「商人らしい名前だな」
冗談を言い、笑いあう。
笑いあうと少しだけ頭に響くが、それも我慢できる範囲内だ。ルサと一緒に笑いあう時はいつも平気なのだが、ルサの声よりもアキンドの声が大きく聞こえる。
「俺はクリス。よろしくアキンド」
右手を差し出し握手を交わす。
「向こうで食べてばっかりいるのはルサティって名前だ」

俺とアキンドがルサの方を向くと、手を振ってくる。
それと同時にこちらへ走ってきた。
「クリス君。大通りいかないの？」
「行こうと思ったんだけど、ここで買い取ってもらえるらしいよ」
俺がそう提案すると、ルサは少し考える。
「そうなんだ、でもちゃんと行きつけ決めたほうがいいとおもうよ」
「それじゃあ、ここを行きつけにすりゃあいいじゃんか！」
ルサがいい終わると同時にアキンドが口を挟む。
行きつけを決めると後々楽になるだろう。アイテムを売りさばくのに一箇所で済むのは大変ありがたい。しかし裏路地で店を開けているところを、行きつけにするかは考えものだ。
「クリス君、どうする？」
ルサが俺の顔を覗いてくる。考えていることは大体一緒なのだろう。
「まあ、いいんじゃないかな。アキンドも悪い人じゃなさそうだし」
俺がそういうとアキンドは、ぱちんと手を叩く。
その音に多少はびっくりしたが、表情に出すのはなんとか抑える。
「よっしゃ。決まったことやし商談にしようか」
アキンドは、さあ来いと言わんとばかりに両手を広げていた。

メインメニューからトレードの画面を開き、アキンドを選択する。
そこに今まで狩りで手に入れたアイテムを入れていく。

「うおっ、まじか！」

アキンドが声をあげる。
アイテムを入れていく毎にびっくりした表情になるのが少し面白い。

「あんたたち何やねん！」

アイテムを出し終えるとアキンドは興奮した様子で声を荒げる。

「全部最前線のアイテムやないか！　本当に最前線のプレイヤーだったんか」

「信じてなかったのか」

俺は苦笑いをする。
隣にいるルサは偉そうに胸を張っていた。

「ちょっとまっててな」

アキンドが紙を取り出し、じっと見つめる。おそらく相場一覧表なのだろう。
ルサから聞いた話によると、商人たちは独自にコミュニティーを作っていて、そこで相場を管理しているらしい。
もちろん、それより安く買い取る場合もあれば、高く売り出すこともある。

「それじゃあ、六万五千コルでどうだ？」

一通り計算が終わったアキンドが顔をあげる。
ほとんどが相場通りに計算してある。
「もうちょっと高くできないかな？」
俺がその値段で了承しようと思っていた矢先に、ルサがアキンドに値上げ交渉を行なっていた。
アキンドの顔に焦りの文字が浮かんでいるような気がする。
「これからもここに売りに来るからお願いします」
ルサが頭を下げる。
アキンドを少し困った顔をしたが、すぐに笑顔になり。
「わかった。じゃあ切りのいい七万コルで！」
トレード画面の数字が少し増え、了承ボタンが押される。
視線をルサの方へ向けると、にっこりと笑いうなづく。
指がトレード確認ボタンに触れ、トレード完了の文字が出てくる。
「取引成立やな」
アキンドが満面の笑みで話しかけてくる。
「そうだけど、良かったのか」
「構わん構わん。これからもここで売ってくれるなら大丈夫や」
アキンドは立ち上がり、商談用カーペットアイテムを片付け始めた。

「これからどこかいくの？」
不思議に思ったルサがアキンドに話しかける。
「鉱石とかを鍛冶プレイヤーに届けに行くんや。他のもんを買い取る金も尽きちまったしな」
片付け終わったアキンドは、俺たちにお礼をもう一度言ってから走り去って行った。
「なんか面白い人だったね」
ルサが笑いながら話しかけてくる。
確かに特徴的で話してて飽きないタイプの人だった。
「そうだね」
俺が返答すると、ルサはアキンドが走っていった方向へ走り出し。
「それじゃあ、中央通りに行こっか！」
と笑顔で振り返る。
日が暮れるまでに帰れることを期待しつつ、走っていくルサを追いかけた。

一休み・後編

吐き気が襲ってくる。
裏路地でしゃがみ込んでしまった俺をルサが心配そうに顔を覗いてくるが、大丈夫とは言えなかった。
問題が起きたのは大通りに入ってから数分であった。
大通りの活気さに驚いていた俺だったが、周りの音の大きさに気分が悪くなってしまったのだ。
もちろん我慢はしたが耐え切れなくなってしまい、ルサに肩を借りながら裏路地へと退避していた。

「クリス君。大丈夫かな」

ルサが心配そうな声を出す。
喋ることも億劫だったが、心配させまいと何とか声を絞り出す。

「大丈夫だよ」

顔をあげてルサを見るが、よほど俺の顔が酷かったらしくルサの表情には心配の色しかなかった。
今まで、極少数のしかいない最前線組で活動していた俺にとっては人の声が大きな雑音にしか聞こえなかった。
もちろん客引きの声が嫌いな訳ではない、むしろ好きの部類に入るのだが、叫ばれるとものすごく頭に響くのである。

「そろそろ行こうか」

俺はフラフラする体を無理やり起き上がらせ、立ち上がる。

「駄目だよ！　もう少し休んでから行こうよ」
ルサが目に少しだけ涙を浮かばせ、静止してくる。
「楽しみにしてたんでしょ？」
ルサに問いかける。
昨日の夜からルサとの話しは、はじまりの町へ出かけることばかりであった。
もちろん俺自身も楽しみにしていた。
ルサに心配をかけてばっかりだと、申し訳ない。
最初に出会った時から今まで迷惑をかけっぱなしであったし、こんな俺とパーティーを組んでくれたことは感謝しきれないくらいだ。
それの恩返しと思い、出かけた結果がこんな状況になってしまった。
「楽しみにしてたけど……」
ルサがうつむき加減に言った。
「俺も楽しみにしてたんだから楽しもうよ」
無理やり笑みを浮かべるが、引きつった笑顔になっていたのだろう。ルサの表情は変わっていなかった。
ルサは少し悩んだ顔をしたが、すぐに何かを決意した表情になったと同時に俺の手を掴み、引きずる様に路地の奥の方へと歩いていく。
反抗をしようかと思ったのだが、筋力パラメーターはルサのほうが多く振っているため、すぐに押さえ込まれてしまうだろう。
路地を直線すると、一軒の喫茶店があった。
店の名前は《花の季節》。看板にはサクラの模様が描いてある。
ルサはその店に躊躇せず入っていく。

店の中はほとんどが木で作られていて、いかにも喫茶店と言った風であった。
ルサは有無も言わせず俺を椅子に座らせる。
ここに来てようやくルサの口が開いた。
「ここはちょっとしたお気に入りの場所なんだ」
ルサは少し落ち着いた様子で喋りだす。
「このゲームで一番最初に入った店なんだよ」
店の奥から出てきたウェイトレスにコーヒーと紅茶を注文する。
「落ち着いてて良い雰囲気でしょ」
さきほどの心配した顔とは打って変わり、優しい表情になっている。
「そうだね」
ルサの表情を見て少し気持ちが楽になった。
ウェイトレスからコーヒーを受け取り、一口飲む。
コーヒーと温かさと苦味で意識がハッキリとしてきた。
「落ち着いてきたかな?」
紅茶を口にしていたルサが話しかけてくる。
「落ち着いていたよ」
そう答えると、ルサは優しい笑みを浮かべた。

「よかったぁ」

　やっぱり、感謝しきれないなと思いながらコーヒーを口に含んだ。

「大丈夫そう？」

　ルサが心配そうにしているが、大丈夫と答え大通りに入っていく。
耳栓の上から手で耳を塞ぐ。
これだけでも結構音が小さく聞こえることを先ほど発見した。
大通りに入って、聞こえてきたのはやはり客引きの声であった。
鍛冶屋、武器屋、道具屋などが所狭しと並んでいる。

「やっぱり活気があっていいね」

　耳を塞ぎながらルサに話しかける。

「だねー。βテストの時よりも商人さんの人数も多い感じがするよ」

　確かに、人数が多いような気もする。
βテストの商人と職人の数が合わせて十数人だと聞いていたが、この場所だけでも百人近い数の人で溢れている。
　アキンドみたいな人を合わせると、ゲーム内でおそらく二百人近い数の商人や職人がいるのだろう。

「今思ったんだけどさぁ」

「ん、なーに？」

ルサはニコニコしながら歩いている。
「耳を塞ぎながら歩くのって変じゃないか？」
そう質問すると、ルサは笑い出した。
「私もそう思ってた」
大通りで二人して笑い出す。
通り過ぎた人が振り返ったが、気にせず笑い続けた。
「あはは。もう可笑しいね」
笑いすぎて涙が出てきたのか、ルサは目元を袖で拭った。
「それじゃあ、最初はどこで買い物する？」
「最初は——……。防具を買いに行きましょう！」
ルサは俺の問いかけに元気よく答え、にっこりと笑った。

「ありがとうございました——」
店員は俺の耳に視線を集めながらも、お礼を元気よく言う。
俺たちは新しく防具を購入した。
俺の防具はほとんど初期のもので、ルサはそれなりのものを装備し

ていたが、これから迷宮区を探索するには最新の装備を整えようと相談して決めた結果であった。
ルサは軽金属防具で、白をベースとして、青色で装飾をしてある。いかにも女騎士と言った感じだ。
俺の防具は革で出来ていて、茶色や黒色と言った地味な色で飾られていた。
革防具は敏捷に特化した防具で、防御力は金属系防具には適わないが、その分素早く動くことが出来る。
「なんか強くなった感じがするね」
ルサが笑顔で言った。
確かに強くなった気がする。もちろんどれほど強くなったのかは、試してみないことには分からないが。
「次は武器強化だね」
ルサはにんまりと笑った。
武器強化は運の要素が高い。しっかりと素材を集めれば九割以上の確立で成功するのだが、もちろん失敗することもある。
俺自身も他のゲームで強化に失敗し続け、破産しそうになったこともある。
「βテストの時にフレンドになった人が鍛冶屋やってるらしいんだけど、そこで大丈夫かな？」
「強化詐欺とかもあるらしいから、そこで大丈夫だよ」
強化詐欺とは受け取った素材を少なくして強化することをいう。
今では鍛冶屋が強化画面を開いて、素材の確認をしてから強化をするのが主流となっているが用心に超したことは無い。

ルサが言っていた鍛冶屋は防具屋からさほど離れていないらしく、一分くらいで着いた。

「多分ここだとおもうんだけど」

ルサが露天の前で立ち止まる。

「らっしゃーい」

露天の看板をルサと一緒になって見ていたところ、やる気のなさそうな声が聞こえた。

「ルーちゃんかな？」

ルサが露天の店主に話しかける。

「その呼び方。もしかしてルサティか？」

店主は武器の手入れをしていた手を止めて、顔をあげた。

茶色の長い髪を一つ結びにして、スッとした輪郭の顔。吸い込まれそうな茶色の綺麗な瞳、着ている服はオーバーオールにTシャツのみで、腕には多少の筋肉がついているのがわかる。

「やっぱりルーちゃんだー！」

ルサは《ルーちゃん》と呼ぶ女の人に抱きつく。

「おいおい、ルサ。ルーちゃんって呼ぶなって言ってんだろうが」

慣れた手つきでルサを引き剥がす。

βテストの時もこんな感じであったのだろう。二人とも笑ってい

た。

「それにしても、ゲーム開始から三週間も顔を出さないつーのは、どういった了見だ？」

ルサのこめかみをグリグリしながら笑っている。本気で痛がってないか？

「あうー。痛いよー。ごめんなさいってばー」

ルサは何とか脱出をすることに成功したらしい、いつの間にかに女店主に向き直っていた。

「それで、そいつは誰だ？」

顎に手を当てて、俺のほうへと向く。
耳を押さえている手を離す。さすがに耳に手を当てながら挨拶するのは不自然だろう。

「ルサとパーティーを組ませてもらってるクリスと言います。よろしく」

手を差し伸べる。

「鍛治屋のルーだ。呼び方はルーでいい。さん付けとかは性に合わないからな」

ルーはにかっと笑い、握手をする。
ルサと手を繋いだときとは違い、柔らかい感じではなく、女の人らしいスベスベしている手であった。

「鍛冶屋って言っても武器専門で週休四日だけどな」
そういって、ゲラゲラと笑う。
確かに、週休四日は珍しい。というよりも無いと言っても過言ではない。
「それでクリス。その耳に刺さってんのは何だ？」
笑いながらも質問を投げかけてきた。
「耳栓ですよ」
「耳栓？」
少し不思議そうな顔をする。
当たり前の反応だろうが、ルサが少しだけ困った顔をしている。
「俺はＦＮＣ。フルダイブ不適合者なんですよ。人より音が聞こえすぎてしまう障害を持ってます」
俺は本当のことを言った。うそをつく必要は感じられないからだ。
「ほー。耳栓で音って聞こえなくなるのか？」
「一応、人よりかは聞こえるんですが、あまり支障はないです」
先ほど倒れそうになったが、普段の生活に支障はないからそう答えておいた。
「なら大丈夫だな。それにしてもルサと良くパーティーを組めたな」

今の話題にはあまり興味が無かったらしい、そっちのほうが俺自身も気が楽で良かった。

「どういう意味ですか？」

質問の意味があまり分からず聞き返すと、急いでルサが口を挟んできた。

「ちょ、ちょっとルーちゃん！」

焦ってルーに襲い掛かるルサを片手で押さえ、笑いながら俺との会話を続ける。

「こいつβテストの時には戦闘狂って呼ばれてたんだぜ」

ルサが騒いでいる。

少し頭に響いてくるが、一人の叫び声くらいなら全然耐えられる。

「グループ推奨のクエストボスに一人で挑んだり、あとはフロアボスも一人で挑んだこともなかったか？」

ルーは笑いながら喋っているが、ルサは本気で止めに掛かっている。

「ルーちゃん！　怒るよ！」

「あはは。悪い悪い。彼氏の前じゃお淑やかにしてんのか」

ルーの言葉にルサの顔が真っ赤になる。

「クリス君とはそんな関係じゃないよっ！」

全力で否定される。
それはそれで悲しい気もするが……。
それにしてもルーが言った《戦闘狂》という言葉が気になった。

「ルサが戦闘狂って？」

「あぁ。βテストの時のルサのあだ名だよ。βテスト内で一番死亡回数が多かったんじゃないか」

ルーはにんまりと笑っている。ルサは諦めたのか、ルーの隣でしょんぼりとしていた。
確かに、戦闘を楽しんでいる気配はあった。
実付きのネペント以外にも、危険度の高いモンスターをいくつか狩っている。
それと戦闘するときは、いつもルサの提案だった気がする。
いつも反対していたのだが、結局押し切られて戦闘するハメになっていたのだ。

「確かにそんな気はしてましたね」

俺がそういうとルーは満面の笑みとなる。

「そんなやつとパーティーを組むとか私じゃ考えられないぜ」

さすがにここで、はいとは言えず愛想笑いに留めておく。

「それで今日はなんだ。強化か？」

「うん。一応」

ルサが答えるが、あまり元気が無い。

「この時期に来るとなると、アニールブレードだな。素材は添加物だけは持ち込みでいいのか？」

いつも添加物だけ持ち込みで注文していたのだろう、慣れた手つきで交渉を始める。

ルサは頷くと、いくつか素材を渡す。

そして《アニールブレード》を二本渡した。

俺がクエストで手にした片手剣だが、ルサにあげることにした。

売っても良かったのだが、メイン武器が一本と言うのも心もとない。

「えーと。強化内容は《鋭さ》＋2、《速さ》＋1、《丈夫さ》＋1。で大丈夫か？」

最終確認をする。

ルサは少し緊張しているのか、先ほどのことをまだ引きずっているのか、無言で頷く。

「失敗しても、私を恨むなよー」

ルーはそういって鉄床の奥に設置されている炉に手を伸ばす。

携行型の炉なので金属鎧などは作れないが、ルーは武器専門だと言っていたので問題は無いだろう。

ルサから受け取った素材を炉の中に流し込む、素材は赤熱する。炉の中は真っ赤な光でいっぱいになる——《鋭さ》を示す色だ。

アニールブレードを炉に横たえると、真っ赤な光が刀身に纏わりつく、それを確認してから鉄床に移動させる。

右手で鍛冶ハンマーを振り下ろす。カン、カン、とリズミカルな音が鳴り響く。

十回目の音か鳴った瞬間に剣が赤く輝いた。

つまり——成功を意味する。
ルサの顔には笑顔が戻る。
ルーもこちらを見て、してやったりの顔をする。
もちろんこれで終わりではないが、幸先いいのは悪いことではない。
ルーは再び、炉の中に素材を流し込んだ。

結果はほとんど成功であった。
ルサの《アニールブレード》はどちらも全て成功で。名前の欄の右側に＋４の文字がある。
対する俺の武器である《スチールショートスピア》も同じように＋４の文字がある。
ルサは鋭さ＋2、速さ＋1、丈夫さ＋1、の使う人を選ぶ武器となり。
俺自身も鋭さ＋1、正確さ＋2、丈夫さ＋1、でこちらも使う人を選ぶ武器となっている。
サブ武器である《ショートスピア》も片方が一つだけ失敗してしまったが、素材を購入してどちらも＋４まで持っていくことが出来た。
こちらは鋭さ＋1、正確さ＋3で普通の武器で使用するならば、凶器の沙汰としか思えない強化になっている。
正確さは《投剣》スキルの命中率を上げる効果があるので、スキルレベルも敏捷値も低い俺にとっては命中率の低さがネックになっていたのだ。
ルーには強化内容を「本当にいいのか？」、と確認されたくらいだった。
「これでようやく終わったな」

汗はかいていないが、額を拭うルーを見て「お疲れ様」、と一言声をかける。

「えーと……」

ルーがそろばんみたいなものを取り出し、少しだけ弄くる。

「強化素材と基盤の追加と手数料で二万コルだ」

結構な額となるが、強化はこの程度の出費が当たり前だろう。運悪く、失敗が続けば二倍三倍は余裕で掛かるだろう。

二万コルを払う。

「まいどー」

ルーの顔がにんまりとする。

「やっぱり、客から金を受け取るときが一番の幸せだな」

「ルーちゃんはβの時からそう言ってるねー」

ルサは強化が上手くいって機嫌を取り直したのか、今は元気がいい。

「そういえば迷宮区まで行ったらしいな」

ルーがふと思い出したかのように話題を振ってきた。

「昨日からだけど、行ってきたよー」

それにルサが答える。

すると、何かに気がついたかのように、はっとした顔になったと思ったら、すぐににんまりとした顔になる。

「あれやっちゃうの？　ルーちゃん」

「やるか」

二人で見つめあいながら、にんまりと笑っている。

あまりいい雰囲気ではないため、先に宿屋に帰ろうとした矢先にルーに引き止められた。

「おい。クリス」

「はい」

「明日は暇か？」

「おそらく……」

「それなら私に付き合え」

有無も言わせない迫力で攻め立ててくる。

反論など出来るわけも無く、無言で頷く俺であった。

戦闘狂の二人

現在、俺たち一行は迷宮区に近い《ルーベルト》という村に来ている。
　村の外見は至って平凡で、家の数は見たところ三十くらいしかない。

「ここだ」

　ルーが立ち止まる。
目の前には鍛冶屋の店がある。
躊躇いもなく店の中に入っていくルーのあとに着いていくと、あまり武器や防具が置いていていない店内が広がっていた。
　始まりの町の鍛冶屋よりかは、はるかに大きいが壁に掛かっている武器は空きが多い。

「おい、店員」

　ルーが店員に話しかける。
どう見てもお客様と言った感じだ。ルー自身が店を開いている身とは思えない態度だ。

「いらっしゃいませ」

　カウンターに佇んでいたのは、俺と変わらないくらいの少女の姿であった。
　後ろの工房には誰もおらず、鍛冶屋特有のハンマーを叩く音も聞こえない。

「すみませんがお客様。現在、武器を作っている兄が素材集めから帰っておらず、販売しかしていないのですがそれでもよろしいですか？」

鍛冶屋の店員は悲しそうな顔をしている。

ここで販売のみで構わないと言うと武器や防具を売ってくれるのだろうが、ここで「いいえ」と言うとクエストが発生するのだろう。

「兄を探してやろうか」

ルーが上から目線で店員に話しかける。

「よろしいのですか？」

店員は少しだけ期待の眼差しをルーに向けるが、再び悲しそうな顔になる。

「兄はこの村を北に行ったところにある《ゴーレムの洞窟》と言うところに行っています」

下を向いたまま、少女は話している。

「冒険者さんには悪いとはおもうのですが、どうか兄を探してください。お礼はいたします」

「わかった」

ルーは即座に答えると同時に店内から出て行く。

なんというか、雰囲気とかよりも効率重視なのだろう。

俺とルサはルーの後を着いていく。

「まあ、大体分かったとは思うがクエストだ」
ようやく、俺が連れてこられた理由を述べられた。
もちろん昨日の夜にルサから話しを聞いていたが、ルーからの説明は一切なかった。
「おそらくお前にとっては初のボス戦だとはおもうが大丈夫だな」
俺の返答は待っていないらしく、先に歩いていってしまう。
「ボスってどんなの？」
代わりにルサに質問することにした。
「んーとね。大きいゴーレムだよ」
期待した答えとは違った答えが返ってくる。
「ダンジョンの名前から予想はつくよ。なんか注意事項とかないの？」
聞きたい情報は敵がどういった攻撃をしてきて、どこに注意したらいいかという点だった。
「とりあえず今のレベルだと攻撃を喰らったら、体力が半分以上なくなっちゃうから攻撃に当たらないことかな？」
少し待って欲しい。
半分削られる？
それは、今やるべきことじゃない気もするのだが。

「ちょっと待って。そんな相手に挑むの？」

「うん」

ルサはさも当たり前かのように答える。しかも即答。

「相手の攻撃は遅いし、距離を保っていれば余裕の相手だよ」

でも、半分削られると。

おそらく、金属鎧を着ているルサで半分くらいと言う事は、俺だと六割近く削られることになる。

そして一番の問題は、ルーの防具だ。

なんとびっくりなことに、布防具を着ている。防具の中では一番低い防御力を持つ。

もちろんそれに伴って敏捷値に補正は掛かるのだが、ルーの能力振り分けは筋力のみに振っているらしい。

しかも、持っている武器は両手槌。ルーのけして低くない身長とおなじくらいの長さがある。

ルーいわく、筋力値が武器で精一杯らしい。

「ルー。本当にその防具で良いのか？」

先に進んでいるルーに追いつき、もう一度確認する。

いまだに救援がこないこのゲームは、本当のデスゲームとなっていることは間違いないのだ。

当初は半信半疑であったが、三週間も助けがないとなると本当なのだろうと結論付けられた。もちろん、今でも疑ってはいるが。

「大丈夫だ」

ルーは先ほどと同じ答えを出す。

「攻撃に当たらなければどうってことはない」

決め台詞を吐くルーにため息をもらす。
ここまで来ると、戻るのは無理そうだ……。
俺だけ戻るという案もあるのだが、おそらくこの二人は俺がいなくなっても行くのだろう。
そんなのほっとけるほど非情ではない。
誘われたということは、俺でもいるだけマシを思われたのだろう。

「そうですか……」

反論も出来ず引き下がる。
ルサは心なしかワクワクしてる様にも思える。
俺自身は不安でいっぱいなのだが。

村を出て十数分。
思っていたよりも早く洞窟の入り口が見えた。
すると、ルーは立ち止まって振り返る。

「ここなんだが、作戦は必要か？」

その質問に俺が反応する。

「必要ですっ！」

自分でもびっくりするくらいの声で叫ぶ。
さすがに、必要だろう。

「そうか」

眉間に皺を寄せるルー。
めんどくさいのだろう。しかし、ここだけは食い下がることはしない。
「作戦は、相手はゴーレムだから斬撃などはあまり効かない。私の持っているハンマーが弱点だから相手の攻撃を弾くことを専念してろ。いいな」
作戦と言うよりも、命令に近かった。
しかし、分かりやすかったので頷いておく。
ルサはすでに知っていたのか、アイテムの確認をしていた。
「それじゃあ、行くぞ」
ルーは俺の了承を取らずに進んでいく。期待はしていなかったが。

洞窟内は思っていたよりも明るく、ちゃんと道も整っている。
敵はそこまで多くなく、石の体を持った人型のモンスターが襲い掛かってくるが、ルーの一撃で全て消え去っていく。
おどろいたのはルーの攻撃力の高さだ。
打撃が弱点と言っても、ここは最前線のダンジョンであり、ルーは生産職でもある。
その生産職に火力で負けるとなると、少し落ち込む。
ルサは周りにある鉱石類を集めていて、俺も暇なのでそれのお手伝いをする。
「ルーちゃんすごいでしょ」

ルサが鉱石を集めながらも話しかけてくる。

「すごいと言うか……」

ルサの言葉に返答しながらルーのほうへ視線を向けると、笑いながらゴーレムを叩き潰す瞬間であった。

「ルーちゃんは根っからの戦闘マニアだからねー」

アイテムストレージを整理しながら喋るルサにルーが反応した。

「それはルサだろうがっ！」

ルーはもう一体のゴーレムを叩き潰しながら叫ぶ。

「そんなことないよ」

ルサもその言葉に反応する。

「第三層のフロアボスに一人で挑んだときのことを話してやろうか」

ルーは周りのゴーレムを倒しきったのか、俺たちに近づいてくる。

「うっ」

その言葉を聞き、ルサは顔を青くさせる。

「フロアボスに笑いながら特攻して行ったのは誰だったかなー」

ルーは楽しそうに話している。

「わーわー。ルーちゃんその話は駄目ーーーー」
よっぽど聞かれたくないのか、全力で止めに行くルサ。
そんなに凄かったのか……。
「わっはっは。まあ、この話しはこのクエストが終わってから話すとしよう」
豪快に笑うルーに対してルサはしょんぼりとしている。
「もうその話しは忘れようよぉ」
懇願に近い形でルーにお願いしていた。
「まあ、その話しは置いといて。そろそろだぞ」
ルーの視線の先には暗闇が広がっている。
整備された道もその暗闇の前で途切れていて、暗闇の先は異質を放っている。
「それじゃあ、再確認だ」
暗闇の前で腰を下ろす。
ここらへんは安全エリアで敵も出てくることは無い。
「まずは攻撃だが、ボスは殴り攻撃しかしてこない。しかも、予備動作からも遅いから避ける事は難しくない」
ルーはいつもより真剣なので、きちんと真剣に聞くことにした。
「問題はリーチが長いってことだな。距離を保っていれば問題ない」

言い終わると同時に立ち上がる。

「ちょっと早くないか！」

鉱石を集めていただけなのでそこまで疲労はないが、問題はルーだ。

数十ものモンスターを相手にして、疲労がないわけがない。

ここは一旦、休もうと提案しかけたときにルーの口が開く。

「早く戦いたくってしょうがないんだ」

顔には満面の笑み。

ルサのほうを向くが同じような顔をしている。

「はぁ。わかりましたよ。行きましょう」

重たい腰を上げる。

気分は最悪だ。

もちろん戦闘にはいれば、気分も切り替わるのだが乗り気ではない。

少しだけ自分がおかしいのかと言う錯覚に陥ったが、決して俺がおかしいわけではない。

周りがおかしいのだ。

デスゲームと化したこのゲームで、生き残る事を一番に考えず、楽しむことを考える者はいないと思っていたが、考え直さなければならないらしい。

「よっしゃ！いくぞー」

ルーが声をあげて暗闇の中に突入した。

遅れて俺たちが入っていくと、周りにあったたいまつに火が付き、周りが明るくなる。
最初に見えたのが俺の身長の五倍近くもある、石の石像であった。
「もしかして、こいつ……？」
少し恐怖を覚え、隣にいるルサに話しかける。
「そうだよー」
気の抜けた声が返ってくると同時に地響きが起きた。
もちろん地震などではなく、石像が動き出したことによって起きたものであった。
「ぎゃーーーーーーーーー」
叫ぶ俺にルーが後ろから蹴りを入れる。
「しっかりしろ。頼りにしてるからな」
その言葉を言い残し、石像へと突っ込んでいく。
「あ、おいっ！　ルー危ないぞ」
俺の忠告を無視して、ルーは突っ込んでいく。
動き出した石像は右足を上げてルーを踏み潰そうとしていた。
ルーはそれを分かっていたようで、回避する。
言われていた通りに攻撃は遅いが、踏み出された足によって地響きが起きる。
ルーはよろけながらも、がら空きの左足へと攻撃をする。
黄色いエフェクトに包まれたハンマーを石像の左ひざ目掛けてぶ

ち当てる。
石像の地響きに負けないくらいの音が鳴り響き、石像が膝をつく。
それを予想していたかのように技硬直が解けた瞬間にルーは高く跳躍した。
空中で大きく振りかぶり、振り下ろす。打撃系の武器の特徴は振り下ろし攻撃に補正が掛かるということだ。重ければ重いほど振り下ろし攻撃の攻撃力は増す。
ルーのハンマーは現在ゲーム内で一番の重さを持つであろう、その攻撃力は計り知れないものになっているはずだ。
石像の体力を見ると、五本の中の一本が七割ほど削られていた。

「なんちゅー防御力してるんだよ」

つい、突っ込んでしまう。
今まで出てきたゴーレムは、ルーの通常攻撃の一撃で全ての体力が消し去っていた。
しかし、今回はソードスキルを二撃いれたにも関わらず、一本目の七割しか削られていない。

「おいっ、クリス！集中しろ！」

着地と同時に硬直に掛かっているルーに怒鳴られる。
こんな呆然と見ている場合ではなかった。
急いで、石像に攻撃を始める。

「反撃っ、くるぞっ！」

ルーが叫ぶ。
石像はルーに目掛けて拳を振り上げている最中であった。
その拳目掛けて、投擲スキル《リサールショット》で槍を放つ。
槍が青い閃光を描き、石像の拳へと吸い込まれていく。槍を強化し

たおかげで命中率も良くなっていることが分かる。
予備動作中に攻撃を受けた石像は仰け反る。
それを見逃さなかったルサが相手のひざ目掛けてソードスキルを発動させる。
盾専用スキル《ラッシュ》。数はそんな多くない、盾による攻撃スキルだ。ノックバックしている相手に放つとノックバック時間が延長される。
剣での攻撃はほとんど効かないために、サポートに徹するしかないルサの機転の利いた攻撃だった。
その隙にルーが再びソードスキルを発動させる。
両手槌専用スキル《ターンアタック》。回転の遠心力を使い、攻撃する。
ルーを軸として黄色い円が出来上がる、相手の足へ一撃、二撃……計六撃の攻撃を行なった。
このスキルは敵に攻撃を当てた回数に比例され、技硬直が増えていく。基本的に三撃当たりで止めるのが主流になっているが、ルーにとっては関係ないらしい。
その間に、拳はルーに目掛けてすでに放たれていた。
俺は槍を拾っていなく、攻撃に参加する事は出来ない。
《クイックチェンジ》で最速で予備の槍を装備したが、すでに間に合わない。

「ルー危ないっ！」

俺が叫ぶと同時に、ルーの前にルサが盾を構えていた。
盾に拳が当たり、ルサが吹き飛ばされた。

「ルサっ！」

ルサの方向を見ると、体力は二割ほど削られていたが、大したことはなさそうだった。

ルーはルサを殴り飛ばした後に残された、腕に攻撃している。
現在、石像の体力は二本目があとわずかと言ったところだ。
石像の足が上がる、それに目掛けて槍を放つ。
石像に当たると地響きとともに倒れる。
ルーはもう一度跳躍をして、ソードスキルを発動させる。跳躍振り下ろし攻撃《インパクト》。

「はあぁぁぁぁぁぁ」

ルーが叫びながら、石像の頭目掛けてハンマーを振り下ろす。
石像も雄たけびを上げる。
体力が一本削られて、残り二本となった。

「こいつ声が出るのか」

ルーが気の抜けたことを言う。

「βの時にはなかったよねぇ」

いつの間にか体力が全回復しているルサが隣にいた。
石像は立ち上がり、もう一度雄たけびをあげる。
ルーは一度石像から距離を置いた。

「なんかおかしくないか」

ルーの顔には緊迫した表情がある。
すると、雄たけびが終わった瞬間、石像が今までとは比べ物にならないくらいスムーズに動き出した。
ルーとの距離とすぐに埋め、拳を振りかぶる。

「なっ！」

ルーは何とか回避する。
拳は床へとあたり、その破片がルーを襲う。
「ぐっ」
うめき声をあげるルーを他所に、石像は再び拳を振り上げる。
「ルーちゃん危ないっ！」
すんでのところでルサが盾で受ける。
今度は吹き飛ばされなかったが、体力は先ほどと同じくらい削られている。
「β の時と動きが違う……」
ルーの顔には焦りが見えるが、すぐさま笑みに変わった。
「面白い。そうでなくっちゃな」
石像との距離をつめる。
「クリス！　今まで通り予備動作があったら牽制してくれ」
「わ、わかった」
「ルサは防御に専念してくれ」
「りょーかいしましたー」
ルーは支持を出しながらも、石像に攻撃する。

ソードスキルは発動せず、通常攻撃だ。
体力は一割も削られていない。
拳が振りあがった。すかさず槍を投げる。
拳に当たり、ノックバックが発生するが、今までより時間が短い。
ルーはそれを予想していたかのように、ソードスキルではなく通常攻撃を的確に当てていき、距離を置く。

「悪い。二十秒だけ時間を稼いでくれ」

ルーはそういって、アイテムウィンドウを開いた。
その言葉を聞き、俺は石像との距離をつめる。
大した攻撃は出来ないが、時間を稼ぐぐらいならば可能だろう。
ヘイト値はルーに集まっているせいか、石像のターゲットはルーのままだ。
ルーに目掛けて放たれた拳をソードスキルで対応する。
もちろん、威力の面ではるかに劣っている俺は吹き飛ばされたが、時間は稼げただろう。
石像は再び、ルーへと拳を放つが、ルサが受け止める。

「よくやった。上出来だ」

ルーはハンマーの頭の部分が一回り大きくなっている武器を装備しなおしていた。
そのハンマーで石像の腕を攻撃する。
石像はノックバックを起こし、すこしの間、硬直する。
ルーはその間に足元へと走っていき、膝へとハンマーを振った。
先ほどとは違った重い音が鳴り響き、石像が倒れる。
ルーは跳躍しハンマーを振りかぶる。

「ちなみにな、この武器。《重さ》＋６だ」

石像に言ったのか、俺たちに言ったのかは不明であったが、《重さ》に特化して強化された武器の破壊力は凄まじいものだった。
弱点である頭目掛けて振り下ろされたハンマーは、意図も簡単に石像の頭を破壊して。石像の体は硝子片へとなり砕け散った。

「いやぁー大量大量」

機嫌がいいのか、ルーは鼻歌を歌いながら歩いている。
クエストボスのドロップ品も凄まじかったが、クエストの報奨もすごいものであった。
少し浮かばれないことがあるとしたら、鍛冶屋の店員であった少女のお兄さんは、すでに亡くなっていたと言う事だ。
ボスのドロップ品の中に、鍛冶屋ハンマーが入っており、そのハンマーの名前に形見と入っていた時点で気がついた。
報奨は素材アイテムがたんまりであったが、全てルーの懐へ入っていった。
その代わりに、俺たち二人は今後の武器の強化やメンテでの手数料は取らないと言われた。
今後のことを考えると、それはとても助かる。メンテや強化の手数料も結構かかってしまうのだ。

「それにしても、βのときと変わってるなんて思わなかったな」

ルーが思い出したかのように言った。

「そうですよ。危うく全滅するかと思いました」

一歩間違えれば本当に全滅しかねない状況であった。

「でも、楽しかったねー」

吹き飛ばされていたにも関わらず、ルサはいう。

「だな」

ルーもそれに同意な様で満面の笑みを浮かべている。

「それでもこれからは気をつけないとな。βテストのときの情報に頼ってばっかりだと、危ないかもしれないぞ」

今さらだとは思ったが、それには同意だ。
俺自身もβテストの時の情報を当てにしすぎていた気もする。
これからは考えを改めないといけない。

「それじゃあ、今日は私が奢ってやる」

ルーが太っ腹なところを見せる。

「「やったー」」

ルサと俺が同時に声をあげた。

その後、ルサの食べっぷりによってルーが泣きを見るハメになったのは内緒のお話。